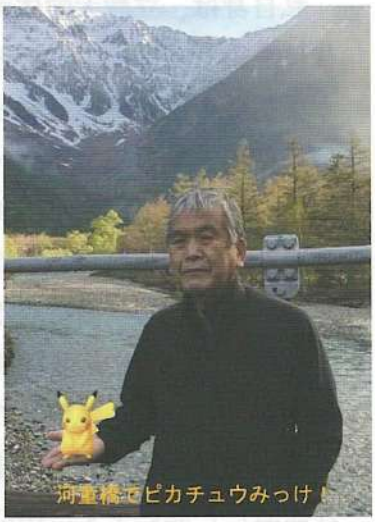
稲山会通信

第 48 号
2024 年 1 月 1 日発行

発行人:行方正幸　発行所:稲門山の会代表　TEL: 043-486-0239　MAIL: yukuemnamekata@gmail.com ©稲門山の会1998

代表　行方正幸(S50 年卒)

巻頭言:稲門山の会四年間の回顧と展望



稲門山の会(ＯＢ会)の代表になってあっという間の４年間が過ぎた。斎藤雄二ＯＢ(S38 年卒)から代表を引継ぐときに、３年間で辞めようと決意していた。それは、①長期政権は悪弊をもたらす　②高齢者がいつまでもポストにいると「晩節を汚して」醜態を晒すことになると考えたからだ。

先輩たちは、代表なんてものは「山の実績があれば、みんな神輿を担いでくれるよ」というので、そうか！　遭難で消耗した学生たちを鼓舞して合宿等のサークル活動を軌道にのせよう、それだけやろうと気楽に考えていたらそんなことは全く無かった。

それ以外にも財務体質の改善、執行部の若返り、３年間に及ぶ新型コロナ感染症対策、事務所問題に早大山の会(学生の会)の会長探しと、息をつく暇もなく難題が降りかかってきた。それをすべてなんとかしろというのだから、山の会の 68 年間の歴史はおそるべし、である。

幸い、ＯＢ会の次期代表は後輩で学生時代に最も登山に打ち込んでいた村田宣男君(S53 年卒)が引き受けてくれることになり、執行部が一気に若返ることになった。早大山の会の会長ついても秤勤ＯＢ(S39 年卒)のご尽力で現役の登山家の加藤健一郎氏を迎えることができた。この両輪なら「研究性・大衆性」と「安全登山」を標榜する「山の会」の将来も明るいだろう。

また、ＯＢたちが元気なのには驚いた。10 年以上も歳上で社会的な名声を得て、隠居してもよい歳なのに穂高の大キレットだ、槍平だ、鹿島槍だ、不帰キレットだと、高度成長期の企業戦士(全学連？)のパワー全開で登山に打ち込み、三百名山も登ろうと嬉々としている。

コロナ禍が終わり学生のサークル活動も順調になってきた。おまけに、この歳になって学生の話を聞くのは本当に楽しかった。身体を壊していなかったらザイルワーク、アルパインクライミング、ビバーク、遭難救助など、私の半世紀の登山経験と登山技術の全てを伝えたいと思った。もう孫の成長を願う好々爺の心境である。

私はこのような愛すべき先輩や後輩に出会えた４年間に感謝している。2024 年から村田執行部が「山の会」を牽引していくことになる。私は会報づくりに専念だ。ＯＢの皆さんは登山や「山の会」から卒業なんて考えないで完全燃焼して欲しい。山を登ってこそ山の会。学生たちにはもっとバカになって春、夏、秋、冬と苦しくも楽しい登山をいろいろと経験して、早稲田大学で素晴らしい思い出を作って欲しい。

たった一度の人生なのだから老兵も若者も前だけ向いて生きて欲しい。　Good by！！

以上

特別寄稿１：早稲田大学山の会会長になって 加藤健一郎（早稲田大学教務部）

昨年７月より早稲田大学山の会会長を務めることになりました。早稲田大学の中でも有数の伝統あるサークルの会長職をお引き受けさせていただくにあたっては経験不足の感も否めませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

私自身は、立教大学体育会山岳部で山登りのイロハを学び、学生時代は冬山をメインの目標として活動をしていました。その延長線で日本山岳会の未踏峰遠征隊としてヒマラヤに行く機会に恵まれ、その際は早稲田・学習院・千葉・立教の４大学混成（5名）で計画の立案、関係者への説明、ネパール政府へのパーミッション取得、装備・食料の準備、技術のすり合わせなどを休学しながら取り組みました。振り返れば、部としての活動も、他大学との合同遠征も、私にとって「山に登る」という目的を達成する「プロセス」こそ、自らの人格を形成する経験だと思います。早稲田大学山の会も、設立趣意書に「研究性と大衆性」を謳い、山好きの仲間が集うコミュニティのみならず、「研究性」という趣旨のもとに「生物部」「気象部」「資料部」「地歴部」「厚生部」の５つの研究部が設けられていたことは、国内外見ても稀有な組織だと思います。山に登る行為そのものだけではなく、プロセスとして研究に目を向ける、その進取の精神に早稲田大学山の会の独自性を感じました。

学生の皆さんは、限られた学生生活の中で山に時間を割くことは難しいこともあるかと思います。私の立場的には日々の学習を疎かにすることは良しとすることはできません。しかし、困難な環境でこそ工夫をして、その工夫する過程で切磋琢磨することで限りある山への時間をかけがえのないものとしてほしいと思います。山登りは、標高の高低や季節を問わず、仲間と一緒に没頭できる、他のスポーツには類を見ない特性があります。山を舞台とした学生生活を充実したものとしてください。

最後に、私自身の現在の仕事について触れさせていただきます。現在早稲田大学教務部入学センターにて、入試・広報の業務を担当しています。入試制度の多様化や地方学生の減少など、早稲田大学の入試制度は内容も環境も大きく変化を続けています。優秀な学生に早稲田大学に興味を持っていただくこともさることながら、早稲田の文化・雰囲気に愛着を持ち、多様な価値観にふれ、早稲田を踏み台にして自己実現を図る気概のある方に入学をしてほしいと思っております。そのことが、早稲田大学山の会の門を叩く岳人を一人でも多く生み出す機会になれば、これ以上嬉しいことはありません。

特別寄稿２：わが彷徨の山々　1000 日

田野辺親遠（S40 年卒）

ドロミテサッソルンゴ　2023 年田野辺 OB 撮影

１．山の会以前

日本隊によるマナスルの登頂がなされたのは、中学生の頃。槇隊長は、私と同じ茅ケ崎に住んでいて、学校で講演会がひらかれた。印象に残る言葉、「世間では、私たちがマナスルを征服した、と言う人たちがいますが、私たちは征服したのではありません、ただ頂上に登っただけなのです」地元の湘南高校に入り山岳部に入った。新人歓迎山行は丹沢塔ケ岳、思えばこれがその後 1000 日も歩くことになった第一日目。

２．山の会の時代

今日まで私が山を続けて来られたのは何といっても私を鍛えてくれた山の会の４年間。

ただひとつの悲しく痛恨の出来事は乗鞍岳の雪崩事故で中村さんを失ったことでした。そこは何の変哲もないハイマツ帯とハイマツ帯の間の斜面、トラバース中突然足元が引き込まれるように崩れた。泳げ！　泳げ！　の中村さんの叫びが聞えた。私は引きづり込まれままいと犬かきのように必死に泳いだ。雪崩が止まった時、身体はコンクリに固められたようだったが肩から上は雪の上にあった。

３．山の会卒業後

３.１単独行に魅せられて

この頃読んだ著作からの刺激も受け、単独行こそ山と触れ合う最高の形態であると思い、小さなテントを買い込みこの世界にのめりこんでいった。

“今までのように忙しい気持ではなく、落ち着いて静かに人生を観照するような態度で山のもの一切を眺め、観照するばかりでなく体験したいという気持ちになった。”（わが山旅五十年、田部重治）

“1000ｍ級の山々の何物をも視界から奪い去るひどいブッシュのなかであってもいいのだ、また単に山々懐深く入りながら、かえって峰々も見ないで谷から谷を歩くばかりでもいいのである。　”（単独行、加藤文太郎）

この稿を書くに当たってこれらの本を読み直してみたが、“山深き所に一人、身を置くこと”が意味されているように改めて認識した。

＊北アルプス　ほぼ全域を歩いた。内蔵助平に佇んだ時、剣沢から阿曾原へ下りの雪渓渡りで取り付き点を見失いうろうろしたとき、白馬岳の賑わいを離れ祖母谷への長いルートを歩いた時、”山深き所“にいることを感じた。

＊南アルプスもほぼ全域を歩いたが、主脈縦走路を外れればそこはまさに“山深き所”だ。仙丈岳から市野瀬、蝙蝠尾根、畑薙山から笊ケ岳を経て二軒小屋、さらに二軒小屋から大門沢へ。そして、光岳の南部、深南部と呼ばれる地域こそまさに“山深き所”だ。暮れなずむ深い樹林の中で一人酒を飲み、シュラフに潜り込む時、まさに先人の言う、山との一体感のようなものを感じる。至福の時である。ただこんなことも、光岳から水窪への道の様子を聞くと失望するよとオヤジ言う、確かに失望、藪はきれいに切り払われていた。光岳から寸又峡までの林道（40 キロ）を下る時は、周囲がだんだん開けてきて“山深き所”よ、さらばと感じる。

＊奥多摩及びその周辺　多くは七ツ石小屋に泊りの２日行程。いつの間にか、この小屋に週末集まってくる常連客の一人になっていた。

いくつかの出来事

＊蜂は怖い：三伏峠から下り林道を歩いている時、ふくらはぎ（いつもニッカを履いている）にズキッと強い痛み。しばらくあるいていると下から登ってきた中部電力の車が上から戻って来て、蜂にやられませんでしたか？　鹿塩まで戻ります、どうぞと乗せってもらった車の中での話「昨夜の雨で蜂の巣が林道に落ちたようです。通報があって今駆除してきたところ、アカハチと言って毒性の強いハチです。ふくらはぎということなので問題は無いでしょう。先程の方は首筋をやられたということで病院に搬送されました」

＊リングワンデルングの体験

場所はアサヨ峰を越えて早川小屋に向かうほぼ水平のハイマツ帯の尾根道、視界 10m かと思われるほどの濃霧。尾根道から、２、３歩を外す、おっと間違えたと気付く、前を見るとすぐ登山道がみえたので進む、実はこの時すでに身体は反転してしまっていたのだ。気がつくと何とアサヨ峰にもどっていた。

＊私の体験した美しい紅葉ベストスリー

屏風の頭から見下ろした涸沢、巻機山、尾瀬の裏燧。前二者は常緑樹とコントラストが抜群、三つ目は正に全山真っ赤。

紅葉についてのお話しをもう一つ。北岳から広河原に降りたとき、バス待ち運転手との会話。私「紅葉がきれいでしたよ」、運転手「今年は全然ダメ。このあたりの葉っぱを見てごらんよ。確かに赤や黄色もあるが色づかづかずに枯れてしまった茶色の葉っぱが多い。気温が一気に下がった時はきれいな紅葉になる」

３.２山の会同期の仲間たちとの山行

昔の仲間たちとの山行もまた楽しい。多くは今は亡き齋藤洋任君がアレンジしてくれた。北海道の山々、東北、上信越の山々。もし彼の誘いがなければ、奥多摩や奥秩父などをほっつき歩いていたことだろう。

３.３山でお酒を楽しむ

古来より日本民族は自然の中で酒を楽しむことを好む。かつて貴族たちは、紅葉、月見、雪見と、江戸庶民は桜の下で。実はこんな酒好き、山好き人間のグループが社内にあった。活動領域は中央線沿線、奥多摩、など、日帰り、各自酒と食材を持ち寄り、山で宴を張る。昭和 50 年頃から始まり、現在、開催回数 350 回を超える。私は東京に転勤してきた平成初期から参加している。

4．チロルのこと

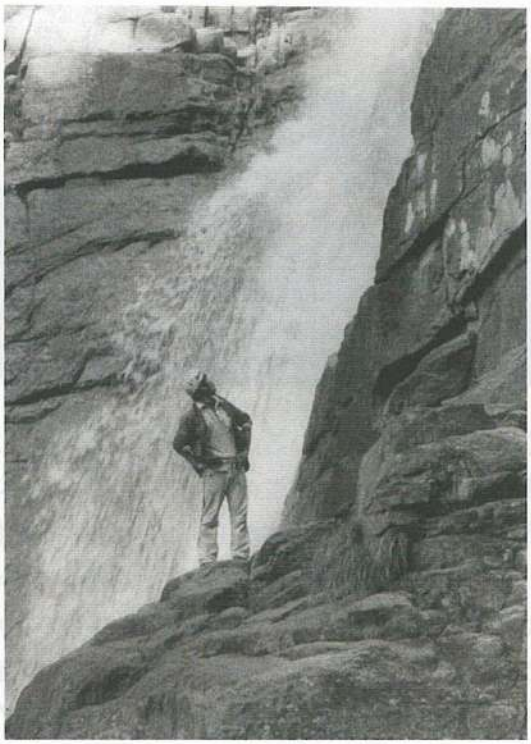
高校で山岳部に入った時、時のキャプテンが、粋な帽子をかぶっている。聞けば、チロリアンハットと言い、ヨーロッパアルプスにチロルという山岳地帯があり、そこの人達がかぶっている帽子であるとのこと。以来、私の中に、チロルと言う響きの良い音と共に美しい山々という記憶が残った。それからウン 10 年が過ぎ定年を迎えたころ、新宿の書店で「チロルの山を歩いてみませんか」というガイドブックを見つけた。夢の世界にあったものが一気に現実の世界のものとなった。当時、別の興味からドイツ語を勉強していたこともあり、その後ミュンヘンでのドイツ語 4 週間コースの後 2 日程チロルに入った。素晴らしい光景に感激。ミュンヘンの書店でガイドブックと地図を買って帰り研究をはじめた。以来、10 数年ほぼ毎年夏、２週間ほど、チロルを楽しんでいる。最初の頃は一人での山行だったがその後我が妻、会社の仲間その奥さんなどを誘って楽しんだ。

5．終わりに

コロナ禍で鬱々としている時、いろいろと山を歩いてきたが何日位歩いたのだろうとふと思い、試算してみた。結果、高校生以来、1000 日は超えているだろうが、1100 日には届かないだろうという結果となった。そんなことを先の山の会総会の時、某先輩らにお話ししたところ、編集部につながり、この様な駄文をしたためるはめになった。

ところで、私、日本一のお山に登っていないのです。「富士山に一度も登らぬバカ、二度登るバカ」　私の山登り人生、バカのまま終わりそうです。

【特集Ⅰ：沢登りの記録】



F１　日暮の滝と行方氏

中御所谷三十八滝

(1)　千畳敷カールへ直登する太田切川中御所谷遡行の思い出

鹿間行喜（S52 年卒）

山行記録もなく今ではとっくに記憶が時間と空間の枠を超えた形而上のファンタジーとして心象に昇華されている。原稿を依頼され想起を試みても浮かぶのは微かな残像、到底断っていたが、いい加減な残像を他の参考資料で辿る内容でよいということで思い出記録として僭越にも引き受けることになった。

社会人２年目 1979 年９月下旬頃だったかもしれない。「鹿間さ～、今度沢登りで中御所谷に行かないかぁ」と突然行方氏から誘われ、「いいですよ」と応えたがどこにある沢かも分からなかった。「あぁ、中央アルプスか」と理解したときは中央アルプスって現役時代に行っていないし、そのくせ千畳敷カールはずっと気になっていたのですぐわくわく気分になった。

深夜船橋を出発。現在なら一路中央道で駒ケ根 IC まで約３時間余だが当時は中央道も東京方面からは勝沼 IC まで。R20 で諏訪、岡谷から R153 で伊那谷方面へ。名古屋方面からは駒ケ根 IC へは既に開通していた。駒ケ根から目的地のしらび平駐車場までは 30 分足らず、現在はマイカー規制により菅の台バスセンター駐車場からしらび平へは路線バスを利用する。ドライブは順調だが、当日は小雨が降り山行を考えると自身は多少重い気分だった気がする。しらび平で仮眠、朝方には雲は厚いものの雨は止み、幾分気持ちにスイッチが入る。出発時刻は既に７時半は廻っていたと思う。

遊歩道から沢に入るとすぐに日暮の滝が現れる（写真１）。さすが木曾駒千畳敷カールに突き上げる沢の雄大さを想起させ、初めからメインディッシュかよといった気前の良さで、見事な滝である。広めのゴーロで草鞋を水に浸して足袋にしっかり固定すると気持ちも締まる。滝は 10mほどの滝が三段連なり、一段目は右側カンテから登るがノーザイルだったか。スラブ状の二段目も右から比較的平易だが、三段目に大きなチョックストーンの滝が現れる。圧感があるが行方氏が右側の草付き凹角をフリーで登る（写真３）。上部にはハーケンが数本打たれていたのでザイルが投げられ、

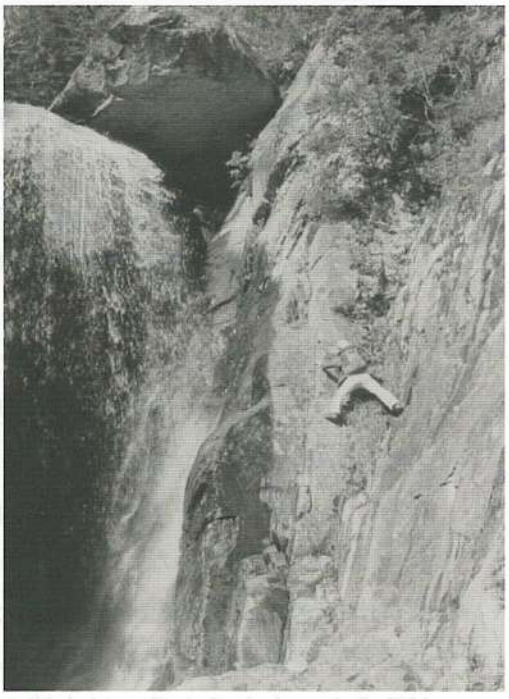
私は確保されて登ったが安心感と共にすっかり満喫できた。

最初から難所を越えこれからの遡行に向けて緊張感が増したが、その後は小ぶりで楽しい滝が続き軽快に遡行。つぎに比較的大きく広めの四段の斜瀑の滝が現れ、これが宝剣の滝らしい。この頃から雲間から晴れ間が差し併せて気分も晴れ晴れ登攀意欲も増大。一段目のナメ滝は左から慎重に攻め、続く２段目の斜瀑は右岸から登り傾斜はあるが特にザイルは必要ない。三段目、四段目もスラブ状を慎重に登るが快適。この後は小ぶりで直登できる滝が続きいい気分だ。上を仰ぐとロープウエイがゆっくり空を進み何気に静寂な賑やかさも感じる。このあたりから南アルプスの荘厳な姿も見えるようだがよく覚えていない。

そのまま遡行すると直登ができないチョックストーンの滝が現れ、これを左岸から大きく巻きながら登る。やがて沢は両岸に狭く囲まれたゴルジュとなり緩い滝が連続して続く。中御所三十八滝（写真２）と呼ばれ、帰りのロープウエイの案内でも見どころとして紹介していたが、多くはそのまま直登できるがやがて右から巻かざるを得ない滝が現れそのままブッシュ帯を沢から離れるように巻き道を進む。巻き道から見下ろすと沢が深く大きな滝が続いているのが見える。滝は下から仰ぎ見るより上から覗き込むほうがはるかに怖い。下降場所を探して暫く谷の斜面を進み適当な木の支点を見つけ急斜面をアップザイレンで沢身に復帰。少し緊張を強いられた場所だったがこの下降地点を後になって確認できず、本来のルートではなかったのだろう。

沢身に復帰して小滝が惜しげもなく続き軽快な遡行、高度が上がると気持ちも高揚、木々も紅葉だったかな？　さらに進むと比較的傾斜の緩い多段の 80ｍの滝を軽快に登る。上部は鏡の滝と言われている広く穏やかな滝が現れる。そのまま小さな滝が続くが流れも次第に穏やかで優しい流れに変ってゆき、傾斜も緩くいつの間にか沢から草地を歩いている。天気はすっかり晴れ、足元には水が湧き出る小径を進み、あたりが大きく広がったところで千畳敷カールの絶景と宝剣、木曾駒ケ岳の凛々しい姿が迎えてくれた。

実に楽しく充実した沢遡行であった。登山道に出たのが既に 14 時 30 分を回っていたように思う。登山道に出ると人の気配であふれ、奇しくも会社の同僚の女性と出くわし、えっ何で此処に？　という唐突さと軽装の格好に拍子抜けした。宝剣岳と木曾駒ケ岳のアタックは時間的に難しかったのでそのまま千畳敷駅へ。ロープウエイから下の中御所谷を振り返りながら下山。



チョックストーンの滝の登攀

時期は９月下旬で紅葉が始まった頃であったように思うが私の思い出ファンタジーの中ではロープウエイで行き交う人の下で花が一面に広がるお花畑の心象として刻まれており、好きな投資格言「人のゆく裏に道あり花の山」の体現アーカイブとなっている山行である。

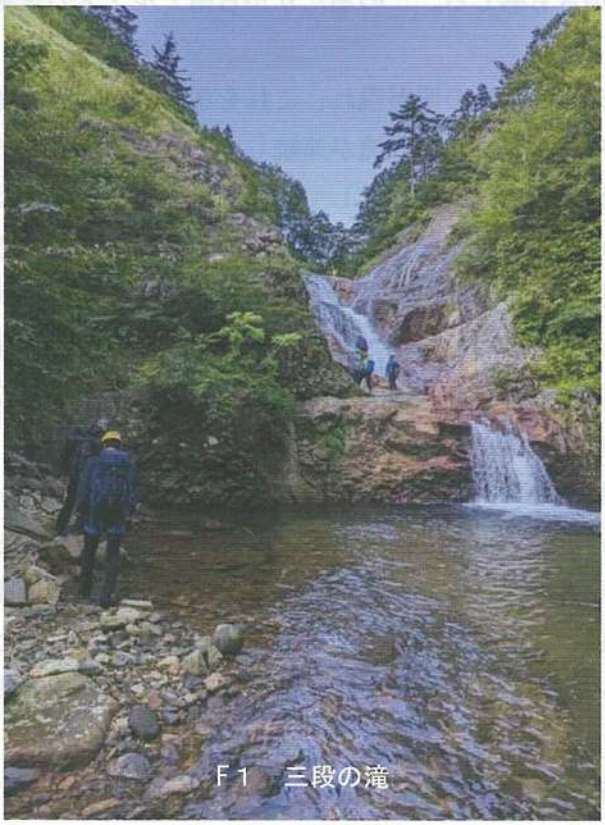
（参考　想定時間）

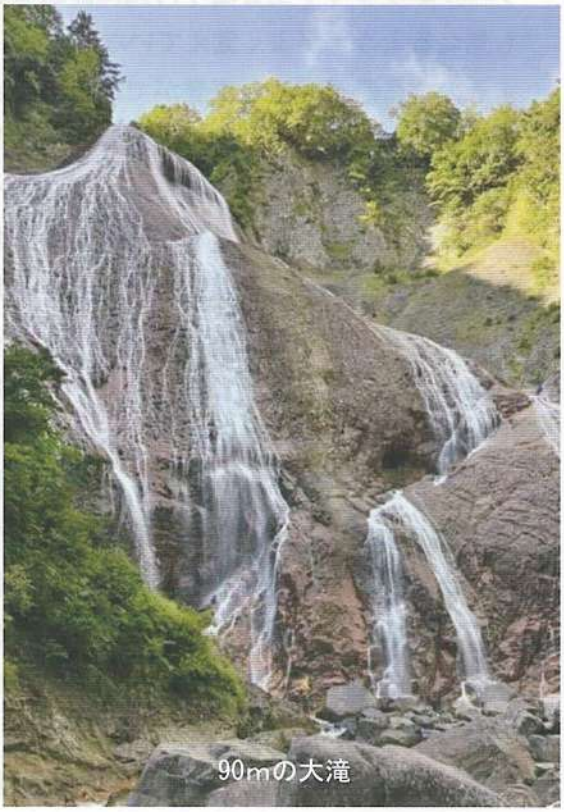
しらび平	7：30
日暮の滝	7：45
宝剣滝	9：30
千畳敷	14：15

(2) 前川大滝沢遡行記

齋藤藤壮呉（M２年）

① 日　程）2023/9/24
② メンバー）修士 2 年齋藤，3 年木村，2 年谷口
③ 天　候）快晴
④ 行動記録）6:50 滑川橋 - 8:10 大滝下 - 9:00 大滝上 - 12:20 潜滝 - 14:10 滑川橋


F１　三段の滝


90mの大滝

昨年度からあっためていた行方さんおすすめの前川大滝沢に。当初、海崎と櫛舎を含めた 5 人の予定だったが，体調不良で急遽不参加となり、３人での遡行になった。前日 21 時に川口に集合し、レンタカーで駐車場に向かう。300 キロ４時間の道のりはさすがに長かった。滑川橋手前のスペースに車を泊めて首を痛めながら車中泊。この土日は涼しく、到着時は 12℃だった。 土曜の朝まで研究出張で九州にいたこともあって、疲れていたのかよく寝られた。

６時に起床，準備している間に ４人組中高年パーティーの車が到着した。ほぼ一緒に出発し，F１にて先に行かせてもらった。 F１は水流左から上がる。一段登ったところから絶妙なスラブが始まる。少し高さもあり、滑ったら止まらなそうなので緊張したがよく探せば手も足もあり上がれた。一応後続にお助けひもを出す。谷口はまだフェルトソールのフリクションのきき具合に慣れていない様子だった。きれいな赤茶けた滑床を楽しみながらしばらく歩くと大滝が出てきた。まったく想像以上だった。登ってみたいし，弱点はわかりやすく登れそうな気がする。登攀記録によると結構もろいらしい。プロテクションがとれるかどうかと水量が問題だろうか。もちろん我々は大滝の左のルンゼを登って巻いた。滝の大きさから、さすがに巻きも長かった。途中２か所、濡れた草がついた、滑ったら止まらなそうなトラバースがあったの

で一応ロープを出したため、すこし巻きに時間がかかった。

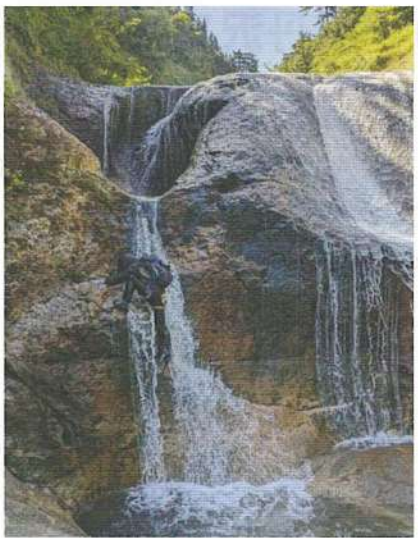
そのあともちょうどいい難易度の美しい滝を越えていった。初秋のすこし引き締まった空気と美しい渓相と山並みに意味もなく叫んでみたくなる。

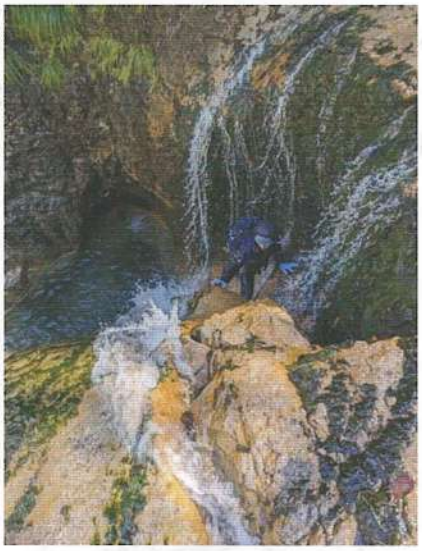
12mのヒョングリの滝は通常は右岸から巻くとのことだったが、登れそうなクラックがあったので木村と挑戦。冷たい水流に打たれながら二段の滝を登った。なかなか自分の中では本遡行でのハイライトだった。

以降は単調だが少し登りにくい巨岩の多い渓相となり、長いなぁと思いながら潜滝に至る。

先の４人パーティーは二つ前の右岸から入る沢を上がり、登山道に出ていた様で、下山中にすれ違った。下山はふかふかの木の葉が敷かれて歩きやすい登山道を軽快に下った。笹が生い茂っていたが、登山道にはみ出している部分は誰かが刈ってくれていた。滑川温泉に下り、なんの囲いもない混浴露天風呂で温まって帰った。

佐野を過ぎたあたりから渋滞で、帰りは５時間ほどかかった。いい沢だった。





ヒョングリの滝の登攀

写真は黄色ジャケット灰色ヘルメットが木村，紺色ジャケット黄色ヘルメットが谷口、黒ジャケット灰色ヘルメットが齋藤。二枚目の大滝下部にちいさく黄色い木村が写っていて滝のスケールがわかる。 透き通った水を泳ぐ木村と谷口、ヒョングリの滝を登る齋藤。

(3) 西丹沢鬼石沢

櫛舎祐太(WMS４年)

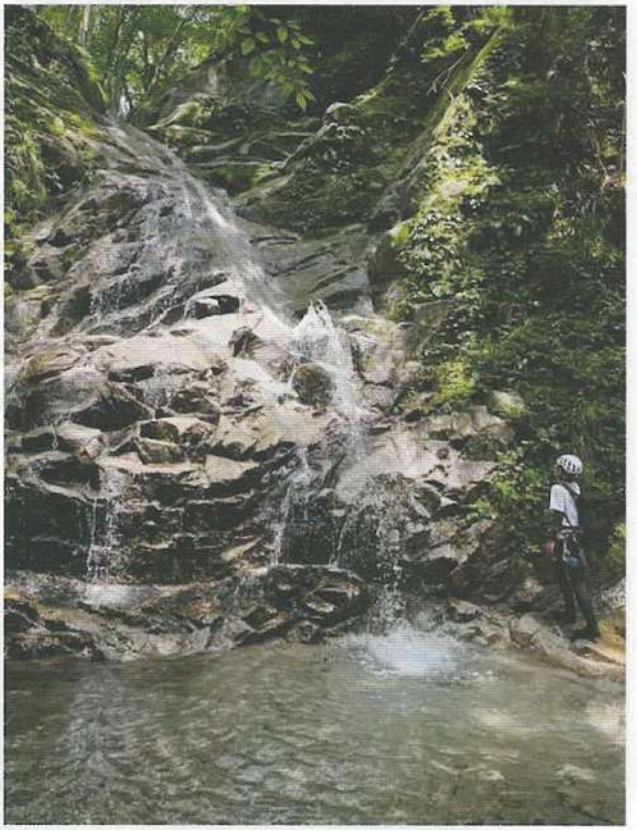
① 日　程）2023/7/22
② メンバー）L 海崎真穂　SL 櫛舎祐太
③ 天　候）晴れ
④ 行動記録）
8：37　大滝橋バス停　行動開始
9：40　一軒屋避難小屋　入渓
12：05　登山道合流
12：10　畔ケ丸山山頂
14：20　下山

今回はヒルの脅威を感じることがなく、また沢のポテンシャルのおかげで大変気持ちの良い遡行でした。

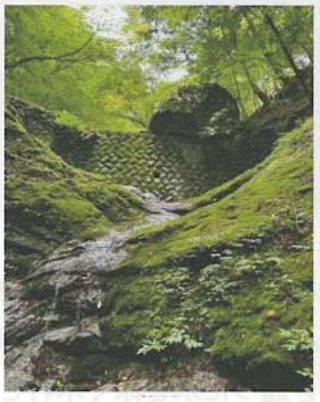
西丹沢鬼石沢遡行図

畦ケ丸山頂にて

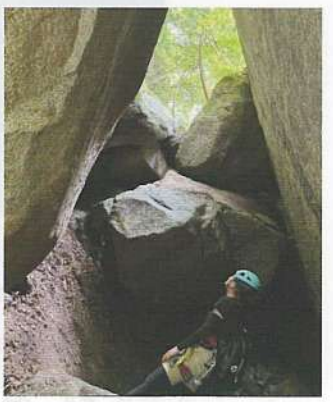
鬼石沢入渓地点



F３を見上げる櫛舎



名物　大岩



胎内潜りと海崎

⑤ 所感など 海崎

当日は７月下旬にしては気候もよく、暑すぎずけど沢の水は気持ち良いというくらいで、沢びよりだった。沢は毎回そーごさんと一緒だったのでそーごさんがいないことをなんとなく不安に思いながらも出発、ぼちぼち歩き入渓点につく。

入渓点からすぐにＦ２、Ｆ３これらを難なく超えた後はフェルトってすげーといいながらナメを進んでいく。

鬼石沢を選んだ理由の一つがナメであったが、ナメが楽しそうだという予感は正しかった. 水流が綺麗だし、水の流れで岩が削られたのかなと、見ながら歩くのが面白い。足の漬かり具合もちょうどよく、非常に気持ちよく遡行していった。じきに、大きな岩に真っ二つに割られている岩を見つけ、よくもこんな綺麗な割れ方をしたもんだ……と思って関心しながら見ていたら、それが体内潜りと呼ばれるものであることに気が付いた。ということはあの大きな岩の隙間に入れるということではないか！　とワクワクして見上げているところ が上の写真。

やはり岩の大きさに感心しながら通過、その後も地図を見ながら遡行を続けもうすぐツメだという点まで行った。ここで、登れるかなー、まあいけるだろ、と思った点で滑り 2m くらい滑落。踵を中心に右足をうち 、踵打撲、右足あざだらけ。夏なのに短い丈の服が着れないではないか！　悲しい。この程度の怪我（にも入らない）だったから良かったものの、「まあいけるだろ」の前にロープを出す等、なるべく安全について考えなければならないということを痛感した。大事故になる前に身をもって感じることができたことが良かった。

雑記にはなるが、こんな感じで遡行し、ツメも短く無事に登山道に出られたので一応畦ヶ丸山の山頂に立ち寄り下山。ナメいい！　丹沢だけどヒルがいないのがいい！　いい沢でした。

櫛舎

入山地点の大滝沢キャンプ場の方がやさしく、次回来るならキャンプもセットで行くのも楽しいのではないかと感じた。シャワークライミングツアーも開催しているらしい。入渓地点まで１時間ほどあり、夏の暑さを感じて沢に早くつかりたくなった。Ｆ３において１ピン目がぐらついていた。事前情報の不確実さを目の当たりにし、現場での臨機応変な対応力が大切であると改めて感じた。所々で連続していた小滝やナメが楽しかった。また、体内潜りはプッシュ系の好みの課題であり、テンションが上がった。全体的にナメが多く、花崗岩のような白色系の石が多く、大変きれいな沢であった。下山中にマスキ嵐沢の滝つぼにマスがたくさん溜まっているのを見つけ。次は竿をもって入渓したくなった。

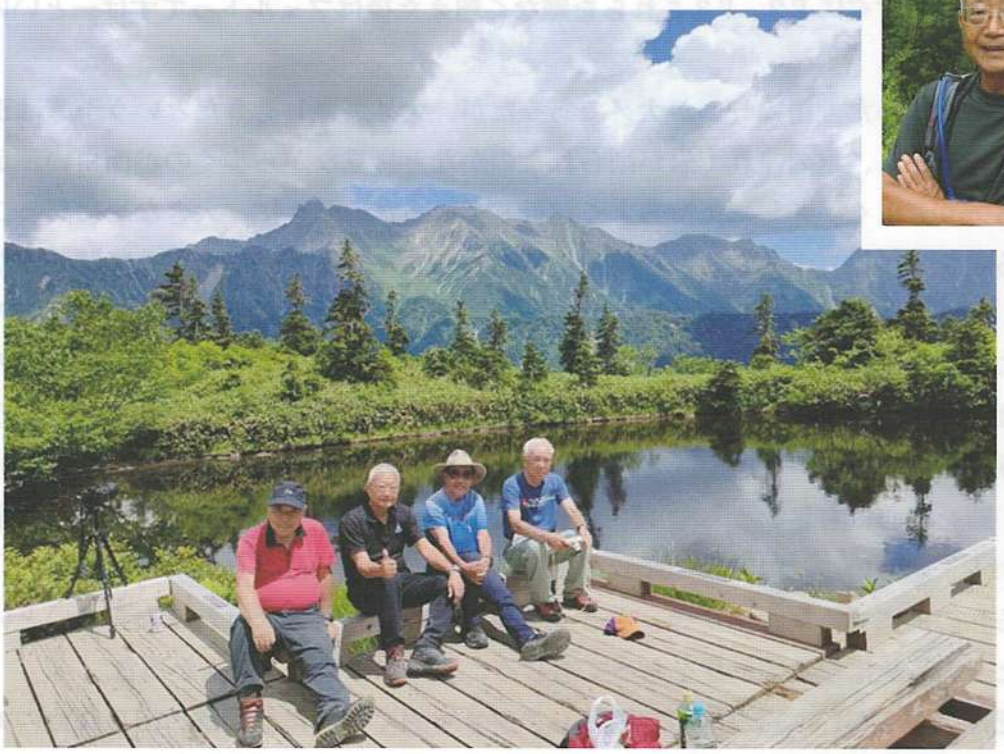
鬼石沢はトポでの分岐が多い沢で道迷いの心配があった。そのため、普段は YAMAP で済ませてしまっているが、今回は地図の標高と谷筋の方角の確認に特に重点的に神経を使った。地図を読んで進んでいる感覚はいつもと比べて大変濃く、とても楽しかった。身体をしっかり覆ったからかは不明だが、虫にもヒルにも食われなかったのは幸運だった

【特集Ⅱ：2023 年夏の記録】

(1) 北アルプス鏡平～双六岳

島田弘康(S46 年卒)

～ＯＢ有志双六山行報告～



コロナ禍で中止していた北アルプス鏡平山荘を起点としたＯＢ有志山行を４年ぶりで実施しました。

①参加者：Ｌ金子（S41 年卒）、ＳＬ島田（S46 年卒）、吉田（S38 年卒）、新井（S46 年卒）

②日　程：７月 24 日　わさび平小屋、25 日　鏡平山荘、26 日　双六小屋往復、
27 日　新穂高温泉下山

連日昼過ぎまでは梅雨明け直後の夏空でしたが、午後遅くから夜には連日雨が降り、双六小屋からの双六岳往復は断念しました。

この時期、弓折乗越から双六小屋のなだらかな稜線は高山植物の宝庫であり、他山塊であまり見ることのできない深山黒百合を始め深山大文字草などが小さな群落で迎えてくれました。

メンバーは有志山行の常連ですが、以前に比べてピークハント意欲のモチベーションは若干低めになりましたが、みなさん趣味人ばかりで話に興じながら和気あいあいの内に、無事に山行を終えることができました。

また過去の鏡平を起点としたＯＢ有志山行の楽

しみの一つに、鏡平山荘の大沢支配人との交流がありました。しかしコロナ禍の下、山荘の増築を果たした大沢支配人は定年退職で山荘から離れてしまいました。

この公募によるＯＢ有志山行は今回で５回目を数え、私はサブリーダーとしてこの５回の山行の企画と手配をしてきましたが、過去の山行では実にさまざまな出来事があり、起点となった鏡平山荘の大沢支配人には随分と気を使って頂きました。

2016年８月　新穂高、鏡平山荘、双六小屋、三俣蓮華岳、黒部五郎岳、太郎平、折立
参加者：金子、島田、太郎良、新井各ＯＢ［稲山会通信34号掲載］

2017年６月　新穂高、鏡平山荘、笠ヶ岳、笠ヶ岳新道、新穂高
参加者：金子、（島田）、吉田、太郎良、佐久間、新井、後藤各ＯＢ

前半笠ヶ岳、後半雲ノ平、烏帽子、大町の大縦走で入山しましたが、後半台風直撃のため急遽笠新道から下山しました。後半から参加予定の島田は入山できませんでした。［稲山会通信36号掲載］

2018年７月　公募でありませんが、ＯＢ有志山行として、北海道、大雪山塊緑岳からトムラウシに８日間の山旅を行いました。
参加者：太郎良、新井、島田、後藤、金子各ＯＢ［稲山会通信38号掲載］

８月　新穂高、鏡平山荘、上高地
参加者：金子、島田、吉田、上原、佐久間、新井、後藤各ＯＢ

鏡平山荘にて夕食後、事務局名達ＯＢからメールがあり高野ＯＢが明神岳Ｓ字状ルンゼで行方不明との連絡。前年のリベンジの雲ノ平、烏帽子縦走を中止し、上高地日本山岳会山岳研究所に向い捜索支援に加わりました。［山の会HP2018年掲載］

2019年８月　わさび平小屋、鏡平山荘、三俣山荘、鷲羽岳往復
参加者：金子、（島田、新井）、吉田、上原、佐久間各ＯＢ

体力温存を考え初日をわさび平小屋泊りとした計画で、出発の前夜遅く現役利藤君遭難の緊急連絡が入り、ＯＢ会役員の島田、新井ＯＢは遭難現場に向い、山行組４人は入山し鏡平に入りましたが金子、吉田ＯＢは通夜と葬儀日程が決まったので、前年遭難した高野君慰霊のため上高地経由で下山。上原、佐久間ＯＢは荒天の中雲ノ平は諦めて鷲羽岳往復を果たしました。［稲山会通信40号掲載］

以上過去４回のＯＢ有志山行にはさまざまなＯＢが参加しましたが、当初の予定通り実行出来たのは2016年の１回目だけでした。

３、４回目と参加された上原ＯＢは４回目を終えて５回目を楽しみにしておりましたが、急な病気で亡くなられてしまいました。ご冥福をお祈りいたします。

鏡平山荘の大沢支配人もいなくなったことや、参加者の高齢化が進んだこともあり、７年間に亙って続いた鏡平を起点とした夏のＯＢ有志山行は今回を持って終了することで合意しました。

クロユリ

ミヤマダイモンジソ

クルマユリ

ハクサンイチゲ

(2) 白馬岳～不帰キレット～唐松岳

海崎　真穂(M1 年)

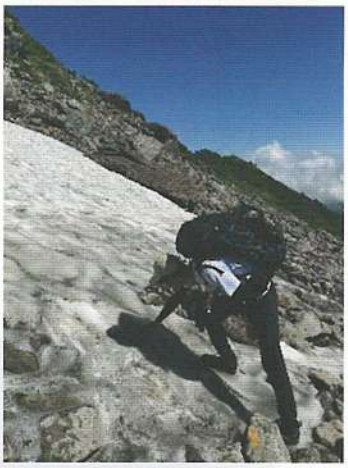
① 日　程)：2023/8/02～03

② メンバー)：海崎真穂(M１年)、斉藤壮呉(M2 年)

③ 概　要)

コースタイム 14 日 6:00 栂池高原着 - 7:45 ロープウェイ自然園駅 - 9:49 乗鞍岳 - 12:17 小蓮華山 - 13:43 白馬 岳 - 14:20 白馬岳頂上宿舎 15 日 5:10 白馬岳頂上宿舎 - 6:03 杓子岳 - 7:48 天狗山荘 - 11:26 不帰２峰南峰 - 12:16 唐松岳 - 1 2:28 唐松岳頂上山荘 16 日 4:50 唐松岳頂上山荘 - 6:50 八方池山荘(ゴンドラ)

8/13



ゴンドラとロープウェイを使って栂池自然園まで。登山道入口のところで、明日の午後には天気崩れるから早めに下山した方がいいよとアドバイスされる。行程をこれ以上短くしたくないなー...と思いながらとりあえず入山。

少し歩いて天狗原。そういえば久々に15kgほど持って歩いているので登りは疲れる。休みもそこそこに歩き、しばらくすると**残雪**を発見。記念に順番に触っておく。そんなこんなしているうちになんとか乗鞍岳に到着。雲が出たり消えたりしているが、この日は天気が良く日差しが気になるくらいであった。

乗鞍岳からしばらく歩くと白馬大池。大池山荘の赤い屋根と後ろの緑に湖の青が映える。高山植物と虫と、遠くの山々に目線を持っていかれがちだが、足元にも自然があふれているではないか。

（下は、そーごさんのお気に入り写真）

少し登り**白馬大池**を上から見下ろすことには天気が悪くなってしまい，池もきれいに見えなくなってしまった．タイミングだなぁ。

ここから１日目の宿泊地白馬頂上宿舎までが長く感じた．次こそ小ピークか！と話すけれども違う...のようなことを繰り返していた（後から確認すると**白馬岳頂上**まで３時間くらいであった）。雲が切れると北アルプスらしい眺望が目の前に広がるので、それを励みにしながら白馬岳山頂到着。写真の通り眺望は望めないけれども、天気の崩れが懸念されている中で予定よりも早い時間で白馬岳まで到着できたのでよいだろう。

１日目は雨が降る前にさっさと夕飯のマトンカレーを食べ、各々テントに入る。マトンカレーごちそうさまでした．

8/14

夜の間風雨があったため、起きる頃にはテントシュラフも濡れており、勿論星が見えることもなかった。朝ごはんを食べ用意をした頃には空が白み始めていたが、とてもではないがいい天気とは言えない。眺望がないとわかりながら雨に降られながらも、杓子岳を巻かなかったのだから、体力は余っていたのだろう。天候を嘆いても仕方がないので白馬鑓ヶ岳に向かっていると、山頂直前で一気に雲が切れ**剱岳立山辺り**まで確認できた。今回の山行で一番良い景色で、これだけで来て良かったと思えた。

ここから天狗の大下りをし、(道を間違えかけたが、後日ここと思われる場所で遭難者が出ていたのでヒヤリとした。)不帰キレットに入る。最初は簡易ハーネスを作らずにいたが、流石に高度感がある箇所があったためハーネスを作る。だがその時には核心部を終えていたらしくハーネスは小活躍で終わってしまった。それでもハーネスのある安心感は大きい。本来ならばもっと高度感があったのかもしれないが天候が悪くそこまで高度感を感じないまま進んでいたら不帰２峰北峰に着き、なるべく天候がいいうちに通過をしたいという思いからすぐに歩き出し南峰(終了点)に到着。一安心したところで記念撮影をしておく。あとは唐松岳まで駆け抜ける。勿論ここでも眺望はないためさっさと通過しテン場へ向かう。

不帰キレット

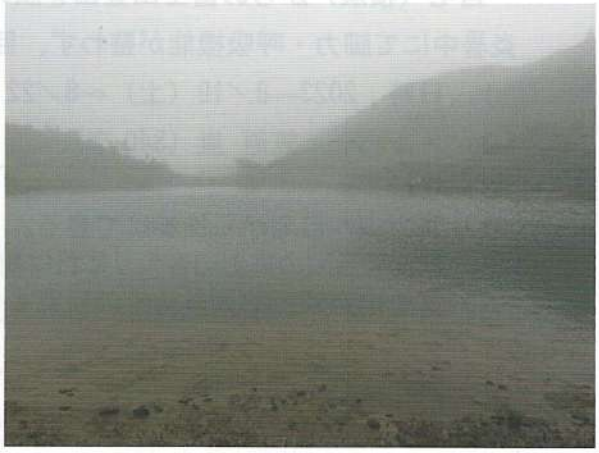
唐松岳山頂

小屋付近とても風が強い。雨も降っている。そもそも小屋宿泊者も少なそうだがこの天候でテントを張るのは物好きしかいないだろうというような天候であった(我々以外にも１人いた様である)。設営で体温をだいぶ奪われ震えながらシュラフに入る。震えながらも濡れた服から着替えていたおかげで起きた頃には寒さも落ち着いていた。かといって強風の中テントから出る勇気はないので晩飯は各々テント内でパスタを頂くことにした。ちょうどアルデンテくらい

で美味しかった。電波が入っていたので返信やらなんやらして寝る。もっとも風が強すぎてすぐには寝られないし、起きてしまうし、早く行動時間になってほしかった。

8/15

朝ごはんのグラノーラを作るのも面倒くさく適当な米類を口にして朝を済ませる。前日の夜は五竜岳まで行けるかという話をしていたのだが、明らかに眺望が望めないこと、雨こそ小ぶりであるが風が強く台風の接近によってそこから下り坂の天候が予想されたことから、今回は八方尾根より下山することにした。綺麗な写真を見たことがある八方池も写真のような感じで残念、ゴンドラが動き始める前には下山、2日ちょいお疲れさまでした。



八方池

所感

海崎

記録のみ書き、その後に所感を書くつもりであったのだが、ここまでで所感のような文章になってしまった．天候には恵まれなかったが，昨年のお盆の塩見岳に比べるとまともであったように感じる。来年こそはお盆の時期に晴れてくれると良いのだが...

一瞬の晴れ間で喜べる性格なので、天候が悪いことで視界がクリアでないことはあまり問題でないが（勿論良いに越したことはない）、衣（食）住の方が問題になるということを学ぶいい機会となった。テントの設営が終わったタイミングでは寒さにより食欲が無くなってしまい、仮眠により食べようという気持ちになったが、風雨が生活の質に与える影響の大きさを知り、なぜこの天気になることがわかっていて山に来たのだろうとも考えてしまった。喉元過ぎて熱さを忘れかけているが、防寒着の大切さを学んだ。

当初の予定では行くはずであった唐松〜爺ヶ岳らへんのリベンジもしたい。

齋藤

北アルプスの上のほうを登ったことがなかったので、後立山の縦走を計画。森林限界で風雨にさらされながらのツェルト泊はとてもいい経験になった。稜線が水不足とのことで2日目に雪の残る天狗池で次の日の分まで補給した。もちろん重さでずいぶん疲れたが、いい登山ができてるなと思った。3日目、五竜岳に登らずにテント場からそのまま八方尾根に下りたのは難しい判断だった。台風7号に伴う雨・風、2日目夜からの喉の違和感など言い訳を挙げればたくさん出てくるが、なにかやりきれない感覚が残る。

小蓮華尾根からガスの隙間にかすかに見えた白馬岳の主稜が印象に残っている。次白馬岳に登るときは主稜からになると思う。

⑶ 横浜～富士登山報告

笠原　豈(S40 年卒)

自宅（横浜）からの富士山登山を試みたので事例として報告します。熱中症アラートが続く炎暑中にて脚力・呼吸機能が整わず、目標未達の標高 3200m で引き返しました。

1．日時：2023—8／19（土）～8／22（火）

2．メンバー：笠原 豈（S40 卒）、

3．狙い
1）富士山へ自宅から徒歩にて登る。
2）京都聖護院の富士山峯入り修行に対し別ルートから登り富士山頂で待合せる。･･･日程依存
3）富士山測候所で大気汚染の研究をされている（卒業学科の）教授に会う。

4．行程実績：
① 8/19：自宅（港南区）～下永谷駅（交叉）～戸塚駅～いずみ中央駅北～長後駅北～門沢駅横～伊勢原市内（国道 246 号）～比々多交番で中断し、バス・鉄道で渋沢駅近くへ宿泊（54.669 歩）。
② 8/20：渋沢駅経由御殿場駅からバスで須走へ移動し宿泊。
③ 8/21：バスにて須走五合目へ移動し登行開始～須走口七合目太陽館泊（歩数不測）
④ 8/22：太陽館発～本七合目見晴館（3200m）で登行中止。須走五合目へ下山し、帰宅。

① 8／19（土）：自宅（横浜港南区）～伊勢原→秦野

午前３時に自宅を出発（前夜用あり睡眠不足）。熱帯夜の夜明け。

JR 戸塚駅交叉：階段登降

用田バイパス沿い江の島線を交叉登降

戸塚駅の階段で右股関節に違和感を感じ、徐々に関節周囲の筋肉にも鈍さを感じ始めた。

計画ルートについて、自宅～富士山頂を 23 に分割し夫々**拡大地形図**を作成し、コンビニ店などを書き込んだ。他方、**タイム計画表**として、道路勾配から試算したシミュレーションタイム表を作成した。両者を胸の耐水バッグに入れて、ルート確認とタイム参照しつつ歩行した。

鉄道交叉６か所、道路の階段昇降、信号待ち、上下勾配などがあり、目標時速はきつかった。

道路からの照り返しが熱く、コンビニ店へ次々入店しては飲物を飲む回数と時間が増えた。皮膚の汗湿りを維持するには成分のある飲物より多くの水の補給を必要としていたことを後で自覚した。

コンビニ店に椅子なく、店外は気温 34℃に太陽直射と照り返しが熱かった。街路樹の一箇所に唯一の影あり、正午の日射を避け１時間弱腰を下ろしたが、横から大型トラックの風圧が続き、休めなかった。

相模川を戸沢橋で渡る。風は蒸し熱い。

小田原厚木道路を地下道交叉

ザック 6 kg を背負い休憩を殆ど取らぬまま、横浜→藤沢市→海老名市→厚木市→伊勢原と歩き続けた。国道 246 号を秦野市に近づき、時間遅れを無視できず疲れもあるのでエスケープすることにした。日比多バス停からバスで鶴巻温泉駅へ向った。途中、下車した客が大音立てて転倒し、救急車が駆け付ける事件が発生し 27 分ロスした。小田急線を渋沢駅で降り、約 1km 歩いて **たかの屋**へ素泊した。

宿では右脚に力が入らないほど疲れていた。歩き始めの違和感が続いていたのだ。・・・当日 54.669 歩。2019 年４月に同コースを歩いたときには開成町まで歩けたのに、今回は停止時間が増えすぎて遅れた。

今回は熱中症警戒アラートが連日出続けた暑さが影響したようだ。尿の色を見て水分摂取が追いつかず、日射疲労も重なり、体内水分が不足しかけていたと解釈した。宿ではコロナ感染対策などで風呂が一人ずつ交代で落着けなかった。

② ８／20（日）秦野→須走

一泊では疲労回復せず、秦野～須走は鉄道・バスで移動し、浅間神社を参詣して扇屋（800m）へ素泊した。

４階の風呂は大窓から富士山を見渡せる設計がすばらしい。夜、TV 視聴で時間を費やし眠くなった。

（余談）：須走は、かつて 60 歳に因んで、往復標高差 60 ヘクトメートルを狙い、須走の谷底を午前零時出発し、ふじあざみラインを歩き、山頂を往復してきたこと（弾丸登山？）があり、懐かしかった。

富士浅間神社（須走）

富士浅間神社（須走）は、創建 807 年で、宝永噴火（1707 年）では３m 以上の降砂に埋まった。

③ ８／21（月）須走～七合目太陽館

須走　宮上停留所から　富士山

疲れが抜けていなかったのでスバルラインの徒歩は辞めて、須走口５合目までを路線バスで移動した。朝一番の7:55発では既に日が高い。以前、真夜中に馬返しから旧道を探したことがあったが今回も不明瞭だった。

５合目の菊屋（2000m）と登山協力金ポストでのんびりおしゃべりしていたら出発が 9:50 になった。

登山道岩あり

調子が出ず、休停止の回数と時間が増え、次々と追い抜かれた。登山者の大部分は外国人だった。

進行が遅れ、太陽館へ電話し「辿り着けないからキャンセル」と連絡したが、手前の山小屋から満室と断られたので再び電話して「キャンセルの取消し」を頼み、行動を再開した。

登行すると心拍数が増し 120bps を超えるので歩を止め、深い呼吸に努めた。息切れの程度が平地と違うのは標高が上がって酸素分圧が下がったためと解釈した。踏みあがりを急ごうとすると肺だけでなく脳でも苦しさが現れ、間質の機能低下を自覚した。呼吸調整の時間が増え、遅速になった。

富士山（須走ルート）の登山道

七合目太陽館（2960m）

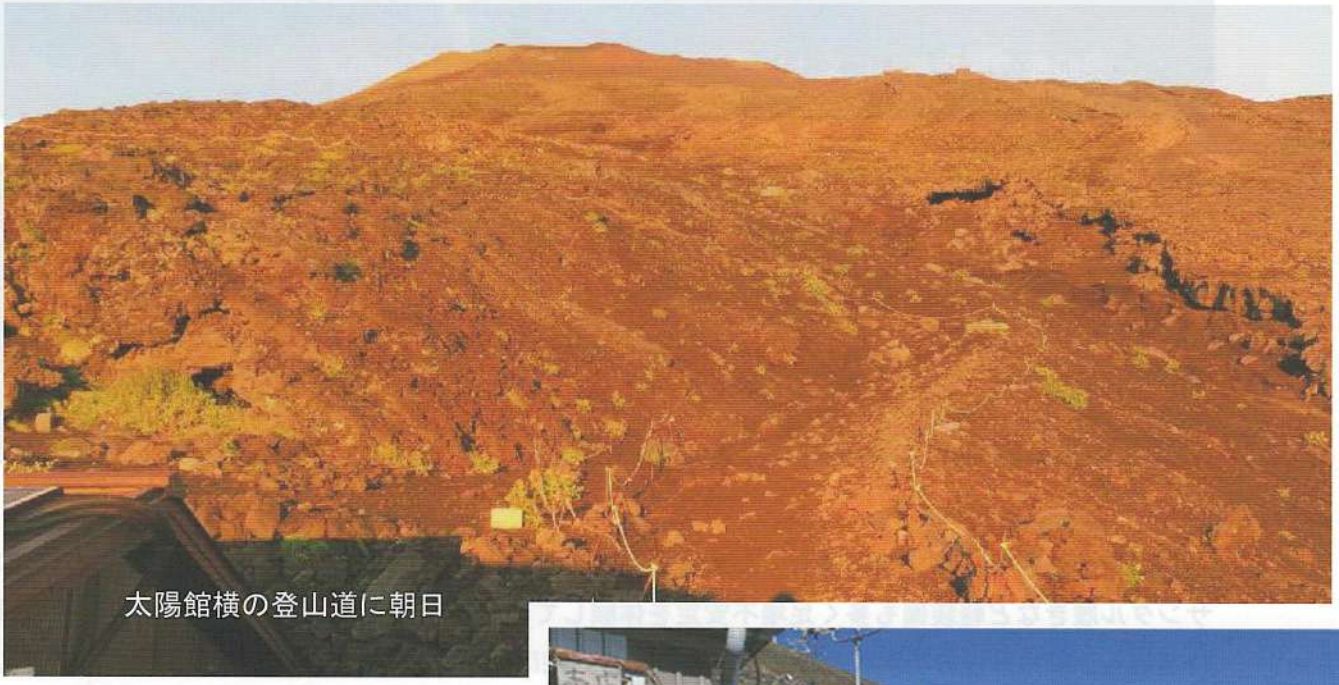
七合目太陽館（2960m）が見え、歩を進め、夕暮れ迫る 18:35 になって漸く辿り着いた。

受付待ちで時間を要したので消灯 20 時までの時間が短く、暗い室内に先客が寝ているので、荷物整理や食事を十分できず、不自由なまま、二段の狭い空間にもぐりこんだ。

①　８／22（火）

１時間毎にトイレ（水洗）に起き睡眠感少なく空腹の４時を迎えた。小屋前へ出ると御来光が迫っていた。

太陽館から夜明け前の雲海



太陽館横の登山道に朝日

体全体に疲労感があり、動くと心拍が反応し負荷をかけると脳へ感じた。４歩あるいては立ち止まり、血液中酸素飽和度 90%未満のかなり低い体感だった。

登行中止：見晴館 3200m へ至った。標高 2600m 辺り酸素分圧の薄さを感じ、標高 3000m 越えで心臓に不快感が現れ、3200m で脳の酸欠リスクを想ったので登

見晴館 3200m で登行中止

行中止とした。

過去 10 回の富士登山では問題なし。今回の息切れ原因は何か？･･･間質機能低下／暑熱影響／疲労蓄積／睡眠不足／循環機能低下／体内イオンバランスの乱れなど･･･高齢（81 歳）で括るのは大雑把？登行時の心拍数 120/秒は私の最大心拍数の 86%に当り心臓に負担をかけたかもしれない。

見晴館の屋根越しに富士山頂へ向かう登山者と上部の山小屋

下山ルートの砂走：御殿場ルートより粗い

途中までブル道下山

下山：砂走を下った。私は安全のため登山用ヘルメットとダブルストックを使った。外国人にはサンダル履きなど軽装備も多く足場不安定を体験していた。五合目でバス待ち２時間、御殿場駅１時間待ち、御殿場線の各駅ゆったり停車などあり帰宅は 18 時になり、適度の疲労とともに終了した。（14, 451 歩）

（付記）

「聖護院富士山峯入り修行」の畠掘さん宛に、見晴館で登行中止の旨を送信しておいたら、返信があり、「われわれもうさぎ組とかめ組にわけましたが、うさぎ組のほうで故障者が出てべた遅れ。世の中計算どうりには行かないですね。・・・」とあった。・・・今年の暑熱は厳しかった。

(4) 大雪山旭岳トムラウシ山縦走記録（３泊４日）木村亮英(WMS３年)

① 日　程）2023/09/14~17

② メンバー）３年：木村、３年：藤原、３年：手塚、１年：齋藤

③　行動記録）

9月14日　東川青少年野営場 C0（06：15）…旭岳駅（06：30）…姿見駅(06：40)…旭岳(09：00)…間宮岳分岐（10：06）…北海岳（10：55）…白雲岳避難小屋 C1(12：33)

9月15日　白雲岳避難小屋 C1(05：29)…忠別岳(09：30)…五色岳(11：46)…ヒサゴ沼分岐(13：22)…ヒサゴ沼避難小屋 C2(14：01)

9月16日 ヒサゴ沼避難小屋 C2(05：13) …天沼(06：26)…北沼分岐(08：13)…トムラウシ山(08：38)…北沼分岐(09：32)…天沼(10：54)…ヒサゴ沼避難小屋 C3(11：59)

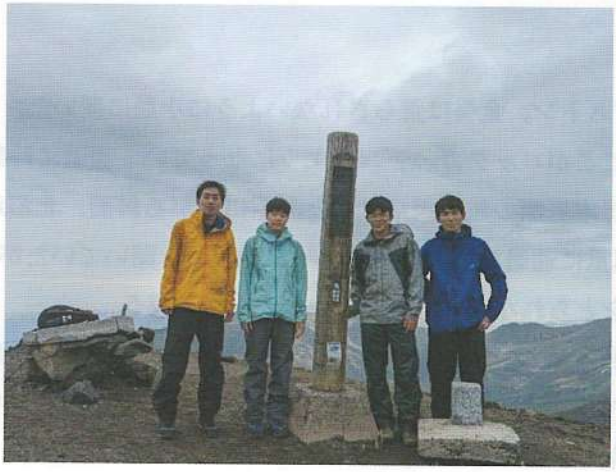
9月17日 ヒサゴ沼避難小屋 C3(05：05)…化雲岳(5：54)…第一公園(8：58) …滝見台(10：45)…天人峡(11：13)

14 日。深夜に通り雨で起きたが朝には降っていなかった。始発のロープウェイで姿見の池へ。使えるものはありがたく使わせてもらった。雨が降る前に旭岳に登りたかった。

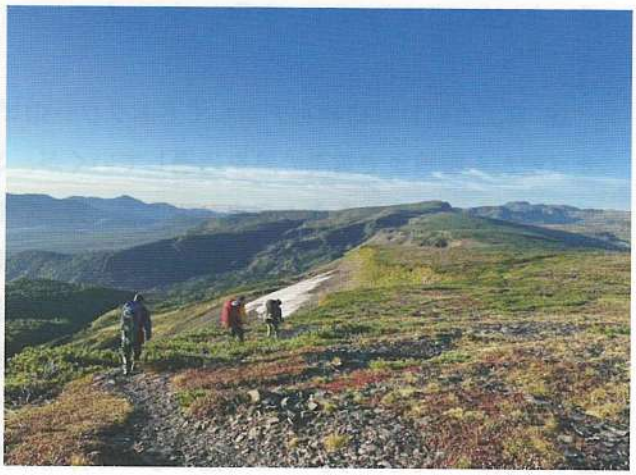
出発前に看板の前で

姿見駅で旭岳を背に

予報より早めに、旭岳まで半分くらいのところで雨が降ってきた。レインを着て山頂を目指した。独特な形のトムラウシ山がかなり遠くに見えた。



北海道最高峰！（木村・齋藤・手塚・藤原）



高根ヶ原を歩く（右奥にはトムラウシ山が、遠い）

白雲岳避難小屋までガスも出てきたが安定して行動できた。だがこれからの行程も考えて小屋泊にした。テントは協力金込みで 1500 円、小屋泊は 3000 円。食事や寝具はなくていいからとても丁度良かった。

15 日。高根ヶ原を通って忠別岳、五色岳、化雲岳、ヒサゴ沼と進んだ。出発時に小屋の管理人さんに高根ヶ原でヒグマの目撃が多いことを教えてもらった。４ｍの至近距離で遭ったことがあるそうだ。基本的には見通しがよく歩きやすい道が続くが、時々藪が濃い場所があったので適宜ホイッスルを使った。五色岳の登りを越えたら木道が整備されていて快適だった。分岐から化雲岳まで連絡のために私と藤原が向かった。OB の方が気象情報を送ってくださってありがたかった。私はテレビで見た山の編集長が登った岩に登るという目的を達成できた。ヒサゴ沼までの下りの下部は泥がえぐれている場所があって少しだるかった。ヒサゴ沼の湖畔は木道が整備されているが壊れかけているのが多い。端っこに乗るとガタンと動くのが混ざっていた。この日は行程中で一番距離と時間が長かったが最後まで気を抜けないなと思った。

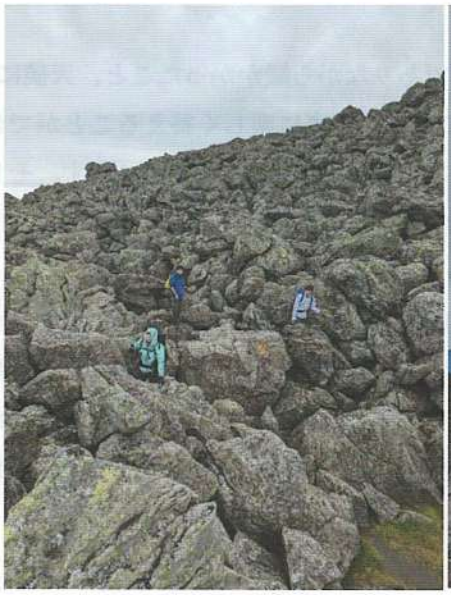
ヒサゴ沼でテント設営

カレーの間にシチューをはさみました

前日の雨のおかげでヒサゴ沼避難小屋のすぐ近くの木道の脇で流水があった。水を作ったり間食をしたりしてゆっくりと過ごした。夕食は手塚が担当してくれた。家で自炊することが多いらしい。慣れた手つきでおいしいシチューを作ってくれた。

16 日。この日は荷物をデポしてトムラウシ山ピストン。食料は荒らされないように小屋に置いた。ヒサゴ沼から稜線まで雪渓の脇を通過していくが、ここがロックガーデンのようになっていて通過に時間がかかった。ここからトムラウシ山まで、美しい日本庭園の他に天沼付近と北沼に上がる斜面、北沼からトムラウシ山山頂と 3 か所ほど岩場があり、慎重に通過した。ルーファイが難しいと聞いていたがペイントを見失うことはなかった。身軽で足元に気をとられなかったのがよかったのだと思う。

北沼分岐はなだらかだったが遮るものがなくて風が強かった。私は温かい水を飲むなどして短い休憩で山頂に向かった。帰ってから土地勘がある状態で事故について調べてみた。事故の時は沼が増水して膝まで浸かったという。ここで濡れるのは非常に危ないなと思った。



ロックガーデンを越える

トムラウシ山についた！

トムラウシ山山頂は意外と人が多かった。多くの人は南側から登ってきたのでトムラウシ温泉からだろう。山頂からは2年前に登った十勝岳連峰の山々が見えた。分かりやすく山々が連なっていて魅力的に映った。ここまで来ればそんなに遠くない。いつかつなげて歩きたい。
ヒサゴ沼にはお昼ちょうどに着いて晴れてきたのでゆっくり過ごした。ただ前日の流水はなくなり、水たまりになっていた。多少汚いが雪渓の下まで遠いので水たまりの水を汲んだ。

17日。5時に出発して1時間で化雲岳まで登った。小化雲岳手前では先に出発したペアが手を振っていた。彼らはご来光をみながら朝食をとっていた。札幌からだといい、気さくに話しかけてくれた。ここからは長い下りになるが、ハイマツがせり出しているのと道が泥濘んでいるので不快だった。齋藤は深い水たまりに足を突っ込んで水没していた。黙々と歩いていると第一公園で木道が現れ歓喜。その後は順調に歩き滝見台、涙壁の九十九折を抜けて天人峡に着いた。

天人峡は廃ホテルが目立っていて入浴できる宿は一軒のみだった。露天風呂から崖を眺めながら達成感に浸った。

予備日。20日まで旭川や美瑛、富良野を観光した。

狩野OBおすすめの梅光軒と行方代表おすすめの山頭火

（体感時間が）長かった下山

所感

9月になって白雲岳避難小屋が使えるようになったこと、9月でありながら暖かかったこと、天候に恵まれたこと、そして一緒に縦走してくれた仲間のおかげで念願の縦走を無事に楽しく終えることができました。忙しい中予定を空けてくれてありがとう。また北海道の山に登りたいねと話しています。そして計画の相談から連絡まで助けてもらった狩野 OB、行方代表をはじめとするコーチ会の皆さま、大変お世話になりました。ありがとうございました。

2 年前に一か月間では味わいきれなかった北海道の魅力を再確認できた。大雪だけでもオプタテシケからトムラウシの未踏区間、東大雪、特に興味があるのは今回のルートで囲まれた忠別川の源流部。広大なくぼ地の真ん中で白雲岳方向と忠別岳化雲岳方向に沢が分かれていた。この沢を遡行して崖をつめて稜線に上がるのは冒険的だと思った。有名なクワウンナイ川遡行もしてみたい。登山だけでなく沢登りやクライミングなど、北海道の魅力をたくさん知りたい。

（木村亮英：CL）

北海道の山々が織りなす景色はとてもカラフルで、大きな川や沼、トムラウシ山の岩場など変化に富んだ地形で、そういったものから北海道の広さをひしひしと感じた。特に、早朝に快晴の中で進んだ白雲岳からヒサゴ沼へ向かっていく道はとても楽しかった。木々に視界が遮られない縦走路で、空気は澄んでおり、ホシガラスが飛び交い、ウサギが駆け抜けている雰囲気がとても心地よかった。

ただ、個人的に一番好きだったのはトムラウシ山だった。遠くから見えているトムラウシも冠のような形をしていて面白かったが、実際に登ってみると、北海道特有の夏の大雪渓や、想像以上に大きなロックガーデンがあったり、山頂近くなのに北沼のような巨大な沼があったり全く飽きの来ない道だった。装備の面では少し反省点があった。今回は自分史上一番荷物を多く持っていった山行で、カバンが膨らんでしまい、ザックカバーでカバンを覆いきれないところがあった。3泊以上の縦走を想定した装備は、また別で新たに用意する必要があると実感した。また、浄水された水場が少なく、メンバーに浄水器を何度もお借りすることになったので、北海道のような自然そのものの山を登る時にも浄水器などの新たな装備を調達する必要があると思った。

ご飯に関しては全体的にとても上手くできたと思う。特に最後のカレーのルーには程よいとろみが生み出されており、これがとても美味しかった。野菜もそこまで小さく刻んだわけではないが、中までしっかり火が通っており、固さもちょうど良く仕上げられた。

今回の縦走では、登山装備を飛行機へ持ち込んだのは初めてであったり、縦走路は比較的人手の加わらない場所が多かったりと、事前の不安要素は大きかった。しかし、CL の木村君が細かい所まで念入りに計画を立ててくれており、他メンバーの支えもあり、無事に登りきれたので感謝したい。自分は北海道の羅臼岳に登りたいと思っており、トムラウシ山の手前の北沼の休憩所でそのことを呟いたことも覚えている。現在ヒグマの目撃情報が絶えない場所だが、その山頂から海を見渡してみたいと思っている。

（藤原隆仁：SL）

Ⅲ　谷川岳だよ全員集合！(6 月 4 日(日)～6 日(火)

1．谷川岳ＯＢ合宿の概要

今年は、ＯＢ会員全員を対象に、下記の通り 6 月 4 日(日)～6 日(火)に谷川岳で１泊２日(Ⓑ班)若しくは２泊３日(Ⓐ班)の合宿を行いました。

記

⑴ 日　時：　2023 年 6 月 4 日(日)～6 日(火)

⑵ 集合場所：　JR 水上駅

⑶ 合宿所：　１泊目：谷川温泉　檜の宿「水上山荘」
　　２泊目：土合山の家

⑷ コース:

・6/4　JR 水上駅→谷川温泉

・6/5　谷川温泉→水上駅→Ⓐ天神平ロープウエイ→谷川岳→天神平→土合山の家(泊)
　　Ⓑ土合→一ノ倉沢（雪渓散策）→土合(解散)

・6/6　Ⓐ土合山の家→一ノ倉沢(雪渓散策)→土合(解散)

⑸ 連絡先：行方正幸(S50 卒) yukuemnamaekata@gmail.com　080-3701-3421
　　笠原　豈(S40 卒) kasaani2610@gmail.com　090-8112-4191

⑹ 合宿参加者(11 人)

廣瀬舜一（S38 年卒）
山根一純（廣瀬 OB 友人）
打矢之威（S37 年卒）
笠原　豈（S40 年卒）
長谷川徹（S40 年卒）
斉藤雄二（S41 年卒）
金子治雄（S41 年卒）
新井昭夫（S46 年卒）
行方正幸（S50 年卒）
鹿間行喜（S52 年卒）
柴原　至（S53 年卒）

乾杯の音頭をとる斉藤前代表

1日目：谷川温泉「水上山荘」

14:30 に JR 水上駅集合だったが、三々五々、谷川温泉水の上山荘に集合し、のんびりと赤谷川の清流を眼下に露天風呂に入る。

18：30 から宴会場合宿開始。いつものとおり、廣瀬 OB の挨拶、斉藤前代表の乾杯となり、後は美味い飯と、温いポカポカの♨で火照った身体に美味い酒がどんどん染み込むにつれ盛り上がって、恒例の近況紹介で、廣瀬 OB が大学時代の左翼女子と保守青年のプラトニックラブと手ぬぐいの蘊蓄を語れば、打矢さんと柴原君と鹿間君の 100 円から 200 円の「一つ出たホイ」の歌合戦に代わるところなんか、昭和ロマンだなあ～と、昔が懐かしくなりました。このような温泉に素晴らしい仲間と酒が有れば、ほぼ天国ですね。

笠原さん、いろいろとご協力頂きありがとうございます。先輩をこき使って申し訳ありません。笠原さんの緻密な進行で素晴らしい合宿になりました。ありがとうございます。

最後に言いだしっぺの廣瀬 OB から、**来年は中央アルプス**を登れる温泉で合宿をやろうよと、力強い提案がありました。(行方)

2日目～3日目：谷川岳登山他

翌日の登山隊４名(廣瀬、打矢、笠原 OB 、山根氏)は、谷川岳頂上近くの標高 1850m 付近で残雪に阻まれて引き返したものの、無事下山し、土合山の家に泊まりました。翌々日、一ノ倉沢出合へ行ってきました

6/5（月）谷川岳ロープウェイ→天神平→谷川岳肩の広場手前の残雪前（高度約 1850m）で引き返し→天神平からロープウェイ→土合山の家泊

6/6（火）土合から一ノ倉沢出合（見物）→土合まで電気バス→路線バスにて水上で廣瀬・山根氏と別れた。

谷川岳山行は天気にめぐまれ順調でした。行動ペースは、廣瀬 OB と山根氏が快調で笠原が遅れ気味でした。ロープウェイ上りが 10 時頃だったので時間余裕がなく、運転終了 17 時に間に合わせました。→帰宅後の疲労感は軽度でした。（笠原）

谷川岳一ノ倉沢

谷川岳山頂直下(笠原 OB　廣瀬 OB　山根氏)

谷川岳（トマの耳　オキの耳）

衝立岩

打矢ＯＢ

２．谷川岳での沢下りの危険度

打矢 之威（S37 年卒）

６月４日の谷川温泉水上荘での稲山会 OB 懇親会の後、５日に広瀬、笠原 OB に同行してロープウエーで天神平まで登った。広瀬さん一行は谷川本峰に登るとして勇躍して出発したが、私は土合に降りる分岐まで同行して、また天神平に戻った。天神平の上部までスキーリフトに乗り、展望台から谷川連峰の大観を満喫した。さて昼食をゆっくりとった後，土合に駐車した愛車に戻るべく天神平を出発しようとしたが、朝、広瀬・笠原ご一行と別れた天神尾根と下山口の田尻尾根との分岐まで 20 分程登り直す必要があり、シンドいなと感じていたところ、リフトのおやじがロープウェイの下に踏み跡があるよというので、楽してそのコースをとることにした。

最初はジグザグが続いていたが、暫く行くと谷の上部になり踏み跡も消えた。

正確な地図を持っていなかったので、自分のいる場所を特定できなかった。後で５万の１で確かめると田尻沢だった。小滝、大滝が連続して現れた。乗り越えたり、高巻きしたり、次第に体力の消耗とそれに従ってバランスが悪くなり、転倒したり、尻餅をついてずぶ濡れになった。空は曇っていたが、幸い降雨状態でなかったので助かったが、沢の上部にシャワーがあれば一気に鉄砲水が推し寄せてもおかしくない狭い沢筋だった。

体力には自信があると思ったが、85 歳にもなると急速に消耗して夢遊病者の様に力が定まらず、あっちにふらふらコッチにどぶんと平坦なや山道とは全く異なる難コースになった。２時間ぐらいで土合だろうとタカを食っていたが３時間過ぎても先が見えず、そのうち大滝が現れた。高巻きしようと左右の崖に登れる傾斜を探したが無駄だった。暗くなったら万事休す、最悪のビバークを覚悟した。アルミのシートや雨具と補助食は持っていたので雨露と寒さはしのげると考えていた。

登山者にも地元の人間にも全く会わず、ここでくたばったら行方不明者リスト入りだと必死になったが寄る年には勝てず、気はあせれども体が答えられない状態になった。最後の大滝を超えると幸いなるかな平坦な河原状態になった。やれやれ助かったと急速に腰が抜けた。しばらく行くと田尻尾根の下山道にぶつかった。１時に天神平を出発して下山道の分岐に着いたのが４時だから、３時間の難行苦行だった。　**今回得た教訓を列記します。**

１．80 歳を過ぎたら自分の体力、判断力を過信しないこと

２．筋肉は若い人の半分以下、従ってバランスが取れず、ちょっとした凹凸でも容易に転ぶ。

３．歩幅が狭くなり、足や手のリフトアップ・ダウンの動作が鈍くなる。

当然の事ながら、雨具、暖房用具、非常食、ライト等の必帯、行動計画の提出は絶対条件です。

Ⅳ　暑気払いだよ全員集合！(8 月 26 日)

～2023年稲門山の会暑気払い･早大山の会加藤会長歓迎会～

8 月 26 日に稲門山の会暑気払い・早大山の会の新会長歓迎会を開催いたしました。実は、この暑気払いは昨年の夏に、吉田 OB(S38 年卒)から「コロナで何年もみんなとお酒飲まないと死んでも死にきれないよ～」と手紙をいただき、昨年の夏に開催しようとしたところ、オミクロン株の大流行で流れて、一年前から宿題となっていたものです。

今回、定員を越える出席をいただき、秤 OB(S39 年卒)にご尽力により早大山の会(学生の会)の新会長にお迎えした加藤健一郎氏の歓迎会も一緒にできて、感無量です。久しぶりに３時間という長時間にわたって無礼講の宴会を開催することが出来ました。やはり座敷で膝を交えて話し込むのは良いですね。

この暑気払いの準備をしてくれた米山 OB(S54 年卒)が直前にコロナに罹り欠席となり残念でしたが、宴会部長の重責を真っ当していただきました。ありがとうございます。

OB の皆さん、百歳まで生きて、死ぬまで山の会の人生を楽しみましょう。現役学生の皆さん、OB なみとはいいませんがもっとバカになって学生時代を謳歌しましょう。加藤会長、そんな学生のこと頼み🙏ますよ。(行方)

記

１．日時：8 月 26 日（土）12:00-15:00

２．場所：完之荘　大隈庭園内
https://www.waseda.jp/somu-d2/kaigishitsu/#link2

３．料理：リーガロイヤルホテル（たん熊北店）

４．会費：OB　8,000 円（料理、飲み放題、税サ込み）
　　学生　2,000 円（同上）

５．参加者（敬称略にて）

●新会長
加藤 健一郎(早稲田大学総務部入学センター)

●学生（4 人）
海崎真穂(M1 年)
櫛舎祐太(4 年)
羽山航平(3 年)
木村亮英(3 年)

●ＯＢ（会員番号順　15 人）
宮野準治（S34 年卒）
　奥様
滝沢信一（S34 年卒）
打矢之威（S37 年卒）
吉田　稔（S38 年卒）
金子治雄（S41 年卒）
新井昭夫（S46 年卒）

大隈庭園完之荘

宮野夫妻と懇談中の加藤会長

加賀谷欣治（S50 年卒）
行方正幸（S50 年卒）
鹿間行喜（S52 年卒）
柴原　至（S53 年卒）
三宅辰幸（S53 年卒）
本田伸樹（S56 年卒）
山路　淳（S56 年卒）
西山　透（S57 年卒）

ＯＢの快気炎全開（新井、打矢、滝沢、吉田 OB）

まあ一杯いこうや！

現役学生（櫛舎、羽山、木村）

盛り上がり最高潮！！

校歌斉唱（加藤会長、西山、金子、宮野ＯＢ）

早稲田！　早稲田！　早稲田！

フレー　フレー　山の会！！

【COLUMN 2】

人間関係を築くための基本原則の学びその1

～考え方と実践のコツ - 幸運を招く素敵な人生を築こう～

廣瀬舜一（S38 年卒）

5：応援団の増える人間関係作り実践のコツ

＝言葉の**創化力**をフル活用しよう

前向き・積極的・元気づける言葉を日常にどんどん使い続け

“始めに**言葉**あり、言葉は**神なり**き” - イエス・キリスト

※この神とは万能の力を持つという意味です

5 - 1　明るく温かい**肯定的な感謝を込めた言葉を**掛け合う

ⓐ**知ってる** ＝ **声掛け**、あいさつ、返事、名前を覚える

ⓑ**認めてる** ＝ **報告・連絡・相談**を的確に

Ⓒ**理解してる** ＝ 話を聴く、共感する、なるほど!納得する

ⓓ**大切にしてる** ＝ 思いやり、親切にする、教える、育む

ⓔ**愛してる** ＝ 無条件に与える、相手に尽くす

5 - 2　感謝の心をベースに利他の心を磨き続ける

＝ **“人を立てれば倉が立つ”**

あらゆるもの（人・物・コト・自然環境 etc）に**感謝の気持**を **“ありがとう”** で伝える

× どうもどうも、すみません

→ **すべて**のことを or **当たり前**のことにも **“ありがとう”** で締めくくる

ことを血肉化すると周りの人たちの**あなたを見る眼**が違ってくる

→ 応援団が急増する

㋑ **“ありがとう”の言葉の連発**が生み出す**マジック的パワー**を使おう

一日３０回、年１～２万回“ありがとう”を使い、３～４年続けると

自分の回りにこうあって**欲しいと願うこと**がどんどん**実現**するぞ

㋺**否定的㊀言葉**ほど他人を**深く傷つける**ものはないことに気付き注意しよう

- 使わないことを習慣にしてしまうとパワー生まれる

㋩「どうもどうも、すみません」の代わりに

ⓐ **“ありがとう”を当り前のコトにも積極的に使用すると**

→ **好運を呼び込むことが出来る**

ⓑ “ありがとう”を**２度言う**（してくれた時そして翌日も）

→ もっと効果的　差別化できる

→ファーストクラスに乗る人物の最大の共通点です - キャビンアテンダント

Ⓒ 内観による**感謝への気付き**を生涯大切にして**人間力成長**のスタートを切る

ビジネスホテル大手の東横インの社員研修には使っています

忘れかけたらだれでも出来る修行ですから、

やってみると人生と**人間関係が大きく拓け**豊かになっていきます

→(してもらったことは多いのに、親にしてあげたことは少ない) ことにハッと
　↳して感謝の心と利他の心への**気付きと血肉化**＝反省のある日々を送る

5－3　ほめることが無意識に出来る自分になる　＝リーダーは**ほめぐせ**を血肉化する

※リーダーは部下をけなすことが当たり前になっているリーダーが多い

㋑他人の小さな変化をみつける**気付力**を磨く
　↳それには**有意注意**の習慣を血肉化する
仕事、プライベートでも自分と接する全ての人を誰でもほめることが出来る習慣をつける

㋺他人の**良い点（善行）を見つけ、ほめ合う**ことを習慣付ける
　↳**「さ・し・す・せ・そ」の連発**で、会話をはずませよう
“さすが！” 知らなかった！ すごい！ 素適！ センスある！ そうなんだ！”

㋩**「一日一善」の実行が運を呼び込む＝相手が喜ぶことをすることを習慣とする**
周りが楽しさに溢れます

ⓐキリストの**黄金律**－「自分がして欲しいことを相手にしてあげなさい」

ⓑシルバー（銀）**ルール**－「自分がして欲しくないことは、相手にもするな」

ⓒ仏教　―　**「無財の七施」**－お金を使わなくてもできる利他の実践
和顔、優しい言葉、相談にのってあげる
手伝ってあげる、優しい眼差し、席をゆずる
“情けは人の為ならず”

5－4　コミュニケーション（会話と説得）は必ずYes　But方式で

㋑相手の主張を**「なるほど」「そうか」**とまずしっかり**受け止め**、
　↳ⓐ次にこういう場合はどうでしょうか！と相手に問い掛ける
　　ⓑこんな見方もあるのではと**自分の意見や指示**を伝える

㋺相手を否定しないため、相手が**心を閉ざさない**ので
　↳自己の意見が正しく**素直な**気持ちで**理解**され易い

㋩対話や会話の中で互いの**良いとこ取り**をやって　×　all or nothing（欧米）
　↳より良い価値やモノを創り上げる
　　相互に**ウイン・ウインのbest**の関係を築く
日本の伝統的な**和の精神**の神髄だ

5－5　何事もYes We Can“出来る”で終わる肯定的言葉を使い続けると

㋑**自信**が生まれ、いつのまにか**能力up**していく－言葉の創価力を生かす
　↳自分の仕事とチーム全体が**明るく前向き**になる

㋺**今出来ないこと**もこうすれば出来ると考えられないか
　ⓐ今はダメでも時間をいただければ明日or1週間後、1か月後、1年後はできる
　ⓑ応援いただければできる・予算を増やしてくれれば
　ⓒやり方を変えてよければできる

㋩今出来ないことも、**能力にing**を付けることで**挑戦する**くせが付く
　↳あいつは**前向きだ**、やり手だと**応援団**が増えていく、ますます仕事がやり易くなるぞ
　　↳**情報**が集まり易く**好運の女神**が微笑んでくれる

【COLUMN 2】

日本岳人列伝その８：武田久吉

金子治雄（S41 年卒）

主な著作、「尾瀬と鬼怒沼」「明治の山旅」

武田久吉は、登山のパイオニアワークでは実績は多くありませんが、高山植物に関心を持つ人なら彼の名を知らない人は無く、しかも岳人には珍しく公に自然保護活動を強力に推進し、社会に登山の意義を大いに知らしめました。

さらに武田が我が国登山史に欠かせない存在理由は、日本山岳会の設立と推進でした。我が国の登山史は日本山岳会抜きには語れませんが、日本山岳会の設立は、ウエストンに勧められて小島烏水が主体となって結成されたことが定説で、私も小島烏水伝で、彼の自伝と国会図書館の解説に基づいてそのように解説していました。

しかしその後、自己を語ることのなかった武田の最後の書「明治の山旅」を読み、昭和 40 年の日本山岳会設立 60 周年に武田が行った記念講演の記録によると、初代山岳会会長には年長者であり文筆家で名が通っていた烏水が就任したものの、山岳会の母体と設立発起人の大半は武田が主宰していた日本博物学同志会だったことが解りました。

当時、志賀重昂の日本風景論に啓発されたとはいえ、武田曰く我が国における登山愛好家は全体で 100 人程度しか推測できず、それに反して植物や蝶、鳥、鉱石など博物学愛好家はその何十倍も存在しており、山岳会は博物学同志会を母体とし、その一支部でのスタート案も検討されたそうです。

ウエストンの「日本アルプスの登山と探検」が邦訳されたのは昭和８年で、上高地にウエストンのレリーフが作られ、ウエストン祭が開かれるようになったのは戦後のことでした。ですから明治 38 年の日本山岳会設立時には、日本アルプスの呼称も無かったし、ましてアルピニズムの概念は無く、登山目的で深山渓谷を跋渉する登山愛好家は武田が言うほんの少数だったのでしょう。

19 世紀西欧世界は博物学の時代でした。明治になり我が国もそれに劣らず若い学徒の間で博物学が盛んになりました。武田は府立一中で植物に興味を抱き、明治 34 年クラス仲間と日本博物学同志会を設立し植物採集活動を開始しました。博物学同志会の会報は人気を博し、学外にも急速に会員が増え、植物採集も山が主体となり、日光男体山、女峰山、高尾、箱根、筑波、八ヶ岳、甲斐駒、戸隠、日光白根、尾瀬と立て続けに採集山行を行いました。

この頃、植物採集で甲斐駒に登った武田は、雑誌で烏水の甲斐駒登山を知り、博物学同志会の高野鷹蔵と２人で烏水の家を訪ねました。その結果植物に興味の無い烏水も武田の博物学同志会に入会することになり、その旨をウエストンに話した結果、帰国する直前、烏水、岡野、武田、高野が昼食に誘われ、アルパインクラブの設立を強く勧められ、英国から資料を送る約束を受けました。ウエストンは、烏水から武田が英国日本公使の息子であることを伝えられており、武田の存在を強く意識したに違いありません。

山岳会設立の発起人として博物学同志会メンバー４人に、烏水と会報発行のスポンサーとして越後の豪農の高頭仁兵衛の６人に加え、武田の知人の高山植物収集家であり東京弁護士会副会長と東京市議会副議長を務める城数馬氏の７人が発起人となってスタートし、初代会長烏水の２年後、高頭が会長を２年務め、３代目に木暮理太郎が９年就任し、登山家や文人、画家など多彩な人々が入

会し順調に発展して行きました。日本山岳会設立の経緯について、私も初めて知ることが多く、我が国の黎明期の山岳活動には武田久吉の存在抜きに語れないことが分かりました。

武田の父は「一外交官の見た明治維新」という名著を残した英国の外交官のアーネスト・サトウで、日本人妻との間に産まれました。サトウはお雇い英国人と共に盛んに日本の山に登っていました。その動機は列伝でも記しましたが、サトウの深い薫陶を受けて育った武田は、登山を志し植物学の学者になり、植物を通じて自然保護活動に足跡を残したのは必然と言えました。

武田は明治38年、５万分の１の地図に旧沼田街道しか掲載されていない尾瀬に入り、日本山岳会の会報第１号に尾瀬の高山植物を紹介し、それによって植物好きの登山者が多数尾瀬を訪れる様になりました。そしてまもなく至仏や燧岳に登山道が無い時代に、早くも平蔵小屋と桧枝岐小屋が建造されました。

やがて大正13年尾瀬沼と尾瀬ヶ原に水を溜めて東電が発電する計画が進行してきました。明治中期に政治家がうやむやの内に上州側の国有地を私有地に変え東電に売却してしまったのです。時の東京営林局長はこの発電計画を疑問視し、公式に武田等に尾瀬の調査を依頼しました。その調査結果により尾瀬の電源開発は取りやめとなり、自然保護の信念を貫いた武田は自然保護活動の先駆者となったのです。

現在のように、世界的に自然保護が叫ばれ始めたのは51年前の1972年ローマクラブの「成長の限界」の警告からでしたが、武田はこれに先立つ12年前の1960年に日本自然保護協会を設立し活動を始めました。これらの先駆的な自然保護活動が、武田が我が国初のエコロジストと呼ばれた所以でした。

数年前、太郎良ＯＢと尾瀬を横切る幻の国道と言われた旧沼田街道を歩いたことがあります。桧枝岐に差し掛かる手前に武田久吉のメモリアルホールがありました。そこで彼が山行に使用した登山靴や多数のカメラ、ぎっしりと書かれた何冊もの山日記を見て、改めて彼が山に植物研究に自然保護に一生をかけていた本物のエコロジストであることを肌で実感したのです。

高山植物に関して余談になりますが、武田の「尾瀬と鬼怒沼」を読んだ際、尾瀬で採集した高山植物は既に現在と同じ和名が付けられていることに驚き、調べてみたら恥ずかしながら江戸時代盛んだった本草学の存在を知りました。本草学は中国の薬草の研究書「本草綱目」を基本に貝原益軒が著した日本版本草学「大和本草」によって研究が盛んになり、現在私たちが眼にする高山植物は全て本草学者たちが山に分け入り、江戸時代にはその大半が発見されました。

本草学者は全国の医者たちで、標本を基に絵を描き出版したのです。牧野富太郎は江戸期の本草図鑑を基に、我が国の植物を西欧式の植物学での分類を行いました。更に余談を加えます。本草学でのヨツバシオガマ（四葉塩竈）の名は、花だけでなく葉まで美しい（浜で美しい）ことから、見たことの無い塩釜海岸を連想して名づけられました。本草学者たちはこのように植物を楽しんでいました。

次回　岳人列伝９　大島亮吉

【お知らせ】

⑶ 早稲田大学山の会(現役学生)の三役の交代について

2023年11月に早稲田大学山の会(学生の会)の三役が次のとおり交代いたしました。

【旧三役】幹事長：羽山航平(３年) 副幹事長：藤原隆仁(３年) 会計：木村亮英(３年)

【新三役】幹事長：井上陽太(２年) 副幹事長：飯田隼介(２年) 会計：深山英郎(２年)

⑸ 2024年総会・新年会の開催について

稲門山の会の総会・新年会については次のとおり開催いたします。

① 日 時：2024年２月３日(土) 15：00～18：00

② 会 場：早稲田大学大隈会館２F(N201・202)会議室

③ 住 所：東京都新宿区戸塚町１-104-19 ☎ (03) 5285-1124

つきましては、2024年１月12日(金)までに同封ハガキに出欠を明記して、提出してくださるようお願いいたします。

【編 集 後 記】

稲山会通信第48号の巻頭言は、私、行方正幸(S50年卒)の稲門山の会の四年間の回顧と展望です。波乱にとんだ４年間でしたが、この２月の総会で退任します。次年度からは村田宣男OB(S54年卒)が代表です。引き続き会員の皆様の応援よろしくお願いいたします。特別寄稿として、７月に早稲田大学山の会の会長になった加藤健一郎氏、人生を賭けた1000日の山行について田野辺親遠OB(S40年卒)があります。

特集Ⅰは「沢登り」で、中央アルプスの中御所谷　鹿間行喜 OB(S52年卒)、東北の前川大滝沢　斉藤壮呉(院２年)、西丹沢鬼石沢　櫛舎裕太(４年)の記録を掲載しました。

特集Ⅱは、「2023年夏の記録」です。コロナが終わり、OBも現役も精力的に山に挑み、北アルプス　鏡平・双六岳、不帰キレットの縦走、自宅横浜から富士山への挑戦、北海道大雪山からトムラウシ縦走とバラエティーに富んだラインナップです。

廣瀬舜一 OB(S38年卒)が大分商工会議所の研修会で講演した、社会人を目指す学生の人間関係の築き方についての連載の最終回です。金子治雄 OB(S41年卒)の連載「岳人列伝⑧」は日本山岳会の基礎をつくった武田久吉と、我が国の岳人が集結して、登山文化、自然文化というものが胎動し、戦後ヒマラヤを目指す岳人の流れが形成されていき、1956年のマナスル初登頂として結実しました。

これからも登山以外の会員の活躍も紹介していきたいと思いますので、自薦他薦の投稿お待ちしています。

最後におまちどう様。2024年２月３日(土)稲門山の会総会・新年会を、〽都の西北の早稲田の杜〽大隈会館で開催いたします。新年会は校歌を唄い人生を完全燃焼しましょう。We will be back WASEDA !!

行方正幸(S50年卒)記